

佐川 春久

SAGAWA HARUHISA

日本列島の東と西で日の出日の入りが約40分違う、と。

どうやったら見る人が使いやすいかを工夫して、書き直しています。ですから初版が安永8年(1779年)に完成して、11年後にこの第2版が出てますが、それぞれ刷りが違うものが見つかっています。場所などの違いが見つかる、すぐに刷り直しているんですね。

第2版が完成した寛政3年(1791年)の時点で噴火している火山は噴煙が描かれています。浅間山も、阿蘇山も、霧島山も。那智の滝など観光情報も盛り込まれています。新潟沖の記載には、天然ガス(燃える気体)が不思議だとか…。また、河川や港が書かれていますので、五街道を歩く旅人だけでなく、水運が主流だった当時の物流にも使われていました。この第2版が赤水生存時の最終版ですが、その後、本屋さんも増えて、幕末100年間のベストセラーになっています。

この赤水図には日本領として竹島が

書かれているんです。戦後、外務省がこの赤水図と文面をつけて竹島は日本領土だと主張しまして、1951年のサンフランシスコ平和条約で調印され、現在も国際条約上は日本領です。

当時のヨーロッパでも赤水図は日本の情報の要でした。鎖国の時代にシーボルトが持ち出したと言われますが、それ以前に長崎のオランダ商館長のイサーク・テイチングが持ち出しています。ですから伊能小図が幕末にイギリス海軍に渡る70年以上も前からヨーロッパで使われていたということもわかってきました。

そのシーボルトが高く評価する「唐土歴代州郡沿革地図」は中国四千年の歴史を12枚にまとめたもので、13枚めの「亜細亜小東洋図」には尖閣諸島がちやんと描かれています。千島列島や蝦夷(北海道)図も別の地図に書いています。

そうして赤水は、誕生から61歳まで高萩で過ごし、その後、61歳で江戸に出て藩主治保の侍講となり、70歳の時に

特命を受け「大日本史地理志」の編纂に従事しました。そこまでして殿様が赤水を手放そうとしなかったのは匹敵する儒学者がいなかったということでしょう。

私は、今でいう「高齢化・情報化・国際化」の先駆けとして江戸時代に行っていた、本当に凄い人だと思います。ですから、明治維新のエネルギーを起爆させたのも、この赤水図ではないのかなあ…と。

高萩市はこのような人物を生む文化的な背景があったのでしょうか？

江戸時代265年間の幕藩体制の一角を支えたのが「高萩」です。水戸藩附家老であり常陸太田のち、松岡城主の中山信敬がいた、歴史と文化のある土地です。赤水の時代は水戸と直結していました。そういう風土の中から赤水が出てきたということですね。

昨年、念願だった赤水関連資料の重文指定が決まりました。顕彰会としてのこれからお話してください。

国の指定を受ける上で文化庁からいわれたのは長久保家、顕彰会、個人などに分散しているものを一本化してください、と。まずは顕彰会が持つ279点から寄付を始め、693点を一括して高萩市に寄贈し、「長久保赤水関連資料」として令和2年9月30日に国の重要文化財に指定されました。

ただ二三百数十年を経たものだから、

これからは補修もしていかなければいけません。お金もかかることですから市の年次計画で行っていただくしかないですけど、国民の財産となるものを残すためにお願いしていきたいと思っています。

これからの目標と活動を言いますと、日本地図学会に長久保赤水地図部会を作っていたら、歴史・地理学上で赤水の業績と位置付けをしっかりとっていただきたいと思います。

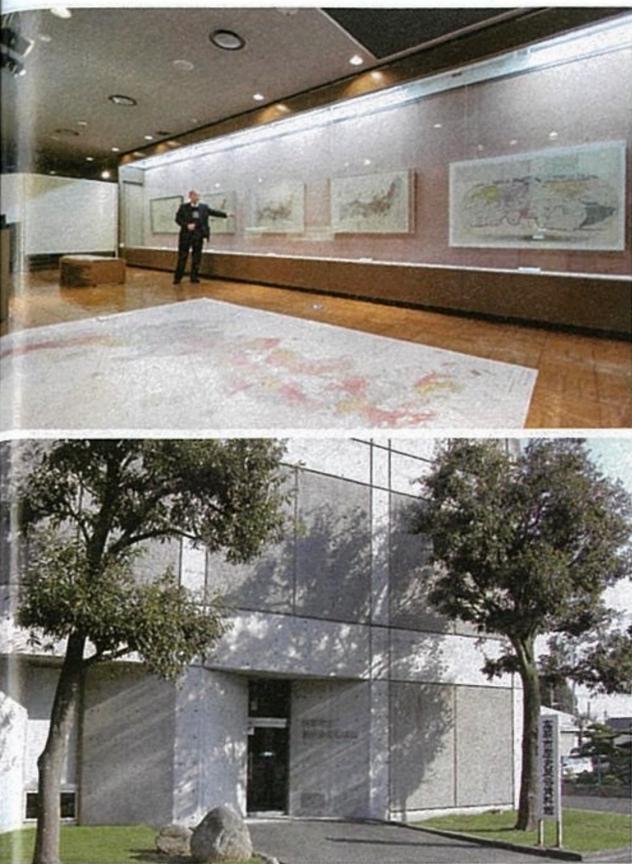
また、教科書に載せていただけて全国区に広げ、県内の多くの図書館に赤水コーナーを作っていただくなど、もっと知ってもらって、世界に伝えていきたいです。

私もでも、生誕300年(2017年)からホームページを開設して英訳を載せて世界中に情報発信をしています。またコロナ禍で活動が思うようにできないのでYouTubeでもいろいろな動画を発信しています(上記のQRコードから見られます)。

さらにはNHKの大河ドラマになって親しまれればと思いますね。

最後に、県北の情報誌、このDAISUKI読者にメッセージをいただけますか。

私は、赤水を通じて地方の人材力を思い知りました。赤水は、郷土が生んだ、茨城が世界に誇れる先生ですので、もっともつと注目していただきたいですね。



高萩市文化会館に隣接する高萩市歴史民俗資料館。高萩市の旧石器時代から近代までの資料を展示し、赤水に関するコーナーが設けられている。

●長久保赤水顕彰会事務局
TEL090-1846-6849
Mail haruhisasagawa@yahoo.co.jp



長久保赤水顕彰会
ホームページ